



さくら通信



Hoju
Group
宝樹会

No.4

2017

宝樹会によるウィーン発の浄土真宗会報誌

仏教は6世紀に日本に伝わりました。浄土真宗は親鸞聖人(1173-1263年)によって築されました。英語では“Shin-Buddhism“と呼ばれることがよくあります。このShinは浄土真宗の真で、真実を意味します。仏教は、差別や条件無く、全ての人の為であると説いています。

道を求める心

岡本英夫

心の奥に「真実」を問うところがある

「道を求める」とは、人間として真の生き方を尋ね求めることです。私たちは、この世に人間として、この私として生まれました。生まれて生きて、さて何をどうするのか。私が私自身をこの世界の中で生きる。人生とはとても大変なところのように思えます。

この人生の中でいかに生きるかを尋ねてゆくときに、私たちが最も大事にしているのは「真実とは何か」ということではないでしょうか。善悪を考えることももちろん大切です。しかし善悪の考え方のさらに奥に、真実とはなにかを問うところがあり、このところを無視しては、私が本当の私として成り立たないように思います。

私は二十代の初めに、偶然の因縁で仏教に出会いました。初めてその教えを聞いてみたとき、それまでの仏教に対する強い反発や誤解はほとんど姿を消し、逆に人間として聞い



木のもとのお話(4)

親鸞聖人

浄土真宗を築されました親鸞聖人も、お釈迦様と似たような道を辿られました。親鸞聖人が生きていらしたのは1173から1263年です。日本は鎌倉時代、ヨーロッパは中世の時代です。

中国から日本に仏教が伝わって当時すでに700年経っており、仏教は日本人によって随分求められ広まっていたのです。

仏教は6世紀に日本に伝わりました。お釈迦様のお教えである經典の書物も伝わりました。經典はサンスクリットを中国語に訳したものでした。

ていくべき教えであるという思いが起こってきました。教えを聞いてみれば、宝の山がそこにあり、私がある時まで出会うことも思うこともできなかった宝が、惜しげもなく降り注がれるような世界でした。道を求める、真実を求める、虚しさを越える、深く充実して生きる、求道...、このような人間として極めて大事なことから、これまでいかに遠く離れたところを右往左往していたかを強く思い知らされたわけです。

いろいろな教えをお聞きすることによって、次第に深い世界を知らされ、大きな励ましを受けてきましたが、そのなかの一つに、「雪山童子の求道の物語」というものがありました。これは「涅槃経」という経典に説かれるもので、お釈迦様が、かつて自分にはこのようなことがあったということで語られる教えです。

「童子」とは道を求める少年のことです。「童」は「道」に意味が繋がり、道を求める精神である「道魂」は、柔らかい少年のころである「道魂」だと言われます。「道魂」は「童魂」だということです。

柔らかいころとは、謙虚なころでしょうか。真実に対して我を張らず、自己を主張せず、静かに頭を下げてその教えを聞く。真実の光に照らされて、自己の内に誤りがあれば、即座に正されていく。真実を慕い、真実を求め、真実に生きようと願い、真実の道の人々と共に歩もうと願い、姿勢を低くして人々にはたらきかける。このような「童魂」にして「道魂」の人になれよ、と仏教は私たちに勧めておられるように思います。

仏教を聞き始めたごく初めの頃から、この「童魂」と「道魂」の持ち主である雪山童子の求道の物語を私の先生から何度もお聞きしてきました。それによって次第に、傲慢でしかも空虚な私、思いが空回りして実行に臆病な私、暖かな潤いがなく人を思わない私、道を求めることなくどこまでも自己に執着する私が少しずつ照らされてきて、それらの問題を謙虚の一事にまとめて真実を尋ね求めよと、求道への誘いを何度も受けてきたように思います。

そこで次回からは「雪山童子の求道の物語」を題材に、道を求めるころとはどのようなものかを少し考えてみたいと思います。

